「何故、尖閣諸島魚釣島に上陸したのか」

荒川区議会議員　小坂　英二

現在、支那の海上民兵が乗り込んだ「サンゴ密漁船」が小笠原諸島・伊豆諸島を侵略している。政府の対応は極めて及び腰で覚悟の無さが露わになっている。今までの尖閣諸島に関しての日本政府の支那に対する腰砕けの姿勢が、小笠原侵略を生み出しているのは明らかである。侵略の激化が予想されたからこそ、地方議員の国護りとして尖閣諸島魚釣島に上陸をしたのだが、小笠原の惨状を見るにつけ、再度、その時の想いお伝えしたい。

平成二四年八月二八日、私が尖閣諸島へ上陸したのは、世界に向けて「ここは先人が血と汗と涙を積み重ねてきて守り継いできた日本の領土であり、戦ってでも守り引き継いで行く覚悟である」という日本人としての明確な意思を示すためである。

そもそも、Ｃｈｉｎａが尖閣諸島を自分のものだと主張を始めたのは、ほんの四〇年程前の話である。尖閣諸島付近の海底に資源があると判明してから、急にＣｈｉｎａは領有権を主張し始めた。Ｃｈｉｎａにとって歴史とは、自らの利益をぶんどるための手段に過ぎず、嘘の情報を国内外に発信し始めた。そうしてＣｈｉｎａという名の強盗が、押し入るそぶりを繰り返し見せているのに、日本政府は何もしない。一方、漂流ゴミやヤギの増殖による環境破壊も放置、漁業活動を望む八重山諸島の漁師の要望には徹底無視を決め込んできた。

Ｃｈｉｎａからの不法侵入漁船はほぼすべてが野放しで乱獲は加速。「現状維持」ではなく、「どんどん悪化させている」のが実態である。日本国が主権を守る気概を持っていれば、「自衛隊の常駐」「港湾施設・通信施設や宿泊施設整備」「海上警備の権限強化」「自然環境調査・漂着ゴミ処理と節度ある観光受入れ」が実現しているはずであるがその動きも皆無であった。

小坂　英二氏
http://kosakaeiji.seesaa.net/

それどころか、日本の主権を堂々と侵害して領海を犯した漁船を名乗る工作船が海上保安庁の船舶に激突してきた際に、撃沈しないどころか、ご丁寧にチャーター機で送り返し、Ｃｈｉｎａでは英雄扱いという有様である。

そして大東亜戦争の停戦日である八月一五日に香港の活動家を名乗る制服を脱いだ軍人を含む工作員の乗る船を撃沈もしない。海の上で捕まえることもしない。不法上陸という、より悪化した形での犯罪を導く対応をし、複数の犯罪に該当するにもかかわらず、丁重な扱いで不法入国として国外退去者として送り返しただけであった。

正に政府の犯罪的な不作為によって尖閣諸島の主権は瀕死の状態に追い詰められつつある。政府が尖閣諸島の主権を守る意思がないのであれば、危機感を持った地方議員が行動すべきであるとの自らの信念に従い、泳いで魚釣島に上陸した。上陸すると、日本の先人が生活を続けていた住居の跡が見受けられたが、崩壊が進んでいること、慰霊碑の劣化も進み壊れそうな状態、かつての港は岩石で埋まっている。その中でも日本青年社の方々が困難な環境の中で設置された灯台が今も堂々と稼働していることに心から感動し、その行動と想いに感謝した。

また、美しい自然がある反面、環境破壊の実態も見た。

幕末から明治にかけて危機に瀕した日本で天皇陛下を縦糸の中心にいただく日本国の国体を守る力の中心となったのは、地方の下級武士である。平成の現代の下級武士は地方議員。国が危機に瀕している時はその現場に駆けつけて行動する責務があると考えている。

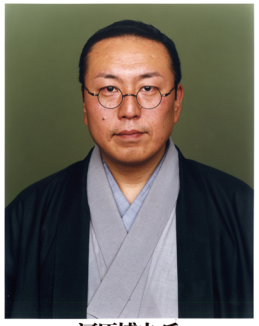
逆説的なようだが、「真に大切なものは戦ってでも守る」決意が外国からの侵略や紛争、破壊を防ぐことに繋がる。相手に媚を売り、問題を先送りすることこそが、後戻りできないじわじわとした侵略を既成事実化してしまうのだ。そんな当たり前のことから目を反らしてしまう社会、政府になってしまったのは、やはり、大東亜戦争後、ＧＨＱによる七年間の占領期間の間に、「白人支配の世界秩序から世界を解放する偉業を黄色人種として成し遂げた」輝かしい歴史的事実を伝え引き継ぐことを禁止され、嘘の歴史を植えつけられたことが一番大きな理由である。

我々の先祖が戦ったのは「東京大虐殺、広島大虐殺、長崎大虐殺を平然と行った白人至上主義の勢力」であり、黄色人種にとっての偉業である。「先人が成し遂げた偉業」が「日本人は悪いことばかりしたし、これからもする筈」という嘘にすり替えられて国民が洗脳され、日本社会の各分野でそうした思想でなければ要職に就くことができない社会になったのだ。そのような歪（いびつ）な社会が再生産され続けて今に至っている。しかし、洗脳から覚めて「日本の素晴らしい歴史」を堂々と語り「国を想い、守ること」が国民の責務であるという当然の意識を持つ方が日々、確実に増えている。その歴史の中で守り引き継いできた領土は、戦ってでも守る覚悟を持つ国民を増やし、同時に真の政治家を増やすための国民運動を先頭に立って盛り上げて行く所存である。

「タブーなき告発」　小坂英二　著　太陽出版

「林子平翁をおもう」

一般社団法人大日本文庫　理事長　河原博史



河原博史 氏

安永七年（耶蘇紀元でいう一七七八年）、当時出島政策の舞台であつた長崎では、オランダ商館長・アーレンヘイトが左記の如く二人の日本人男性に語っている。曰く「北よりして南を侵すは易く、南よりして北を略するは難し。北より南に入ること五～七日なれば風土稍暖かに、産物亦多し。更に十日乃至廿日なれば、愈々暖かに愈々多し。故に人心随つて旺し、利随つて大なり。これ北の南を侵し易き所以なり。而して南よりするは、全くゝ之に反す。和蘭の布哇を取り、韃靼の支那を取り、魯西亜の韃靼を取る。皆、この理に由るのみ」と。

つまり他国を侵略せんとせば、南進するに如くはなし、ということだ。一般的に北進は侵入するにつれ、侵攻者側にとって不利な条件が加えられてゆく。これに就ては、明治天皇の御宇、官軍が奥羽越列藩同盟を討伐するため北上した際、頗る憂慮したことをみても明らかであろう。然るに赤道に向かって南進することは、地球の自転軌道が変わらない限り常に得策となるのである。

而して日本は四方を海に囲まれた海国だ。地に国境線なき国は如何に海防を全うするかが国防の要諦となる。かくして北辺の防備を主張したのは、アーレンヘイトと対話した林子平翁である。翁は『海國兵談』『富國策』などを上梓し、世に海防の重要を説いている。翁、『海國兵談自序』（天明六年）に曰く「海国は外寇の来り易キわけあり。～中略～其来り易シといふは軍艦に乗じて順風を得レば　日本道一三百里の遠海も一二日に走リ来ル也」と。

鎖国した日本が全くの箱庭国家であったこの時代、既に翁は外敵襲来を懸念し警鐘を乱打している。而も翁は啻に武備薄弱なることを以て憂慮するに飽き足らず、幕府と国民の自覚および国防の心得希薄なるをも言及しこれに痛憤しているのである。曰く「昇平久キ時は人心弛ム。人心弛ム時は乱を忘ルヽ事。和漢古今の通病也。是を忘レぢるを武備トいふ」（天明七年『海國兵談』巻之二「水戰」）と。また曰く「一年にして富を欲する者は、無用の費を闕ぎ、君臣の欲する所を省略するに在り。五年にして富を欲する者は、市商の道を便利ならしめ、買道は、市廛に任するに在り。十年にして富を欲する者は、衣食住を定むるに在り。二十年にして富を欲する者は、農を進め、牛馬を生養し、樹を植ゑ、農民金銀を用ゐずして銭を用ゐ、五穀を以て諸品と交易すべし。五十年にして富を欲する者は、山海川沢田野の品物を宜しきに通路し、天地の産物を弁利するに在り。百年にして富を欲する者は、文武に在り。教化行れば、天下の富を保つ」（天明五年『富國策』）と。

噫、二百年以上も前に発せられたる子平翁の警鐘も今はむなしく、北辺は露西亜に侵害され、はや七十年に垂んとしている。更に悲嘆すべきは、吾人が過去の油断と不覚を誡めとせずして今日なお憲法論議の解釈区々たるべきものとし、未だ四海の辺地は無防備に近し。併せて国民の国防意識も脆弱で、精々排他的主張に陶酔しこれを諒とするに止まる。

司馬遷著『史記』に「泰山不讓土壤、故能成其大（※泰山は土壤を譲らず。故によくその大を成す）」ということばがある。秦国の李斯という宰相が、始皇帝に向けて上書した時の一文だ。〝泰山が大を成すのは、どんな土くれをも包容したから〟という意味であるが、こゝではその字義の通りに読む。乃ち日本がその偉大を保持し得るためには、一片の土くれすらをも譲ってはならぬのである。況や非人道的に侵寇されたに於てをや。

思えば先の大戦は自存自衛ともう一つの大義があった。それ〝亜細亜の解放〟である。日本は〝人道の心臓が鼓動する国〟だ。非人道的に亜細亜を支配する西欧諸国は、吾人にとって到底許すべからざる国々であったのだ。人道を重んじる者が非人道的行為乃至勢力に対して命懸けで戦うのは当然だ。然れ共その四年後に、自国が非人道的侵略を被りながら、今尚それを放置しているようでは、日本の人道の在りかが疑われるばかりか、先の大戦の大義も空々しくなるばかりだ。

日本は一片だの土壤も譲らず、且つ人道に違背せし勢力への妥協も譲歩もしない。内にして国防完遂・国威宣布の為、外にして一切の非人道的行為や不当な脅迫乃至ゴネ得に屈しないという、その模範を世界に率先して示し、新秩序を建設する為、北方領土の奪還は実に多大な意義が含まれている。

最後に苦言するが北方領土は失地ではない。吾人はかの地を「喪失した」と自ら認めてはならない。「失った」のではなく今なお吾が領土なのだ。失地なる語はやはりどう考えても相応しくない。道元禅師の曰く「愛語よく回天の力あり」と。「侵されている地」「奪われたままの地」であるという認識が必要だ。